大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金　報告書
Outcome report

計画名 Plan	がん患者における経済毒性の要因―米国疫学会での研究発表
氏名 Name	菅　香織
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	医学研究科社会健康医学系専攻　博士後期課程 1 年
渡航国 Country	アメリカ合衆国
渡航日程 Travel schedule	2024 年　6 月　16 日　　～　2024 年　6 月　25 日

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

申請者は、”Sociodemographic Factors related to Financial Toxicity among Cancer Patients and Survivors: The Second Cancer Patient Experience Survey—A Nationwide Study in Japan”（日本のがん患者における経済毒性に関連する社会経済的要因―『第 2 回患者体験調査』を用いた探索研究）の題目で、Society for Epidemiologic Research (SER)（北米疫学会）に採択された。本研究は、**Financial Toxicity (FT)という「がん治療に関連する経済的負荷による治療継続や生活上のリスク、不安の増大を治療の副作用と捉える概念（米国がん研究所, 2022）**」を扱った、日本で初めての全国規模による研究である。研究方法は、国立がん研究センターが全国のがん拠点病院で治療した患者に対し実施した自記式質問紙「患者体験調査」7080 人の個票を、統計ソフト Stata を用い解析した。目的変数を FT、説明変数を患者の属性・医療情報・生活状況として修正ポアソン回帰モデルを用い、FT と関連の強い患者背景要因を探索した。その結果、**男女ともに「診断時年齢 39 歳以下」、「相談相手の不在（医療従事者含める）」が「経済的負担によるがん治療の断念」のハイリスク集団の特徴である**ことを明らかにした。本研究結果は、研究指導者を通してがん対策推進総合研究会議などで発表され、日本のがん対策評価に貢献している。

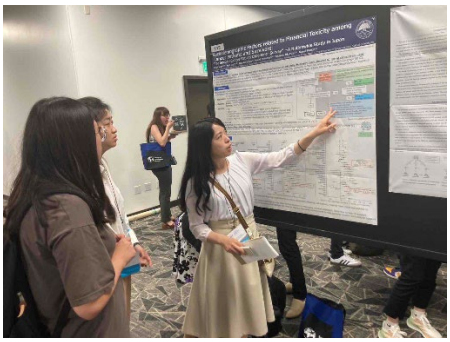
国際学会で本研究結果を発表する意義は、様々な医療制度や文化を持つ海外の研究者と議論することで、超高齢化社会における持続可能な医療福祉制度への考察を深めることである。さらに、SER は学会会期中のセッションだけでなく、参加者同士の議論を主体としたワークショップも充実しておりインタラクティブな学びが得られる。

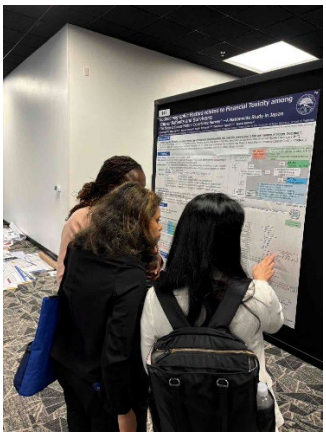
そのため本渡航計画では、自身の研究発表に対し **10 人以上の海外研究者と意見交換**して他国の FT 研究についての知識を深めること、**5 つ以上のワークショップやセッションに参加**し、疫学の基本概念、社会疫学や健康格差、がん疫学に必要な知識と解析手法への理解を深めることを目標とした。

成果 Outcome

研究発表では、1 時間の持ち時間内で 10 人以上の海外研究者との意見交換を達成できた。多くはアメリカの大学院のがん研究者であり、教員や現地の学生、アジア諸国からの留学生だった。教員からは他の解析手法の提案や、他国との比較研究や共同研究への示唆を頂いた。アメリカの FT 研究者からは、Universal Health Coverage (UHC)（国民皆保険）を有する日本でも FT が問題となる理由や、FT の定義について議論した。**UHC 下でも FT が問題になる背景には、「現在の日本の医療福祉制度では患者の社会経済状況に応じた支援が充分ではない」こと、「医療従事者は患者の社会経済背景まで考慮した治療計画を立てられていない」こと、「医療機関と地域コミュニティ間での患者に関する情報共有が不足し**

ているがゆえの現状把握と支援不足」が主な原因であると考える。さらにアメリカの研究者からは、日本ではまだ十分に認識されていない「LGBTQ など性的マイノリティにおける FT の問題、情報へのアクセスの格差」についての重要な知見を頂いた。アジア諸国の留学生とは、お互いの国の UHC が持つ問題点や、UHC があるからこそ見過ごされている問題などを共有することができた。特に、若年がん患者の経済困難が過小評価されがちな点について共通の認識を持てた。限られた資源を適切に分配するために、どの集団により支援を届けるべきか見極めることが非常に重要であることが再認識できた。


アジア人留学生に研究を説明


アメリカ人研究者との議論

普段使用している統計ソフトの本社へ

ワークショップでは、British Medical Journal (BMJ) という著名なジャーナル誌の編集者による、論文が査読されるプロセスや評価される点などについての講義だった。ワークショップは 5 人程度の小グループで形成されていた。講義全体を通して、重要ポイントを参加者に問いかけたり議論を促したりするなど多方向の交流が図れる形式だった。充実した内容を平易な説明で受けることができ、半日のワークショップが非常に短く感じた。国際学会・研究会が初めてだった申請者にとって、海外の研究者と分野外のテーマを議論することはハードルが高かったが、コーディネーターのスムーズな進行や、他の参加者の協力的な姿勢に助けられ、積極的に意見を述べることができた。結果的に、アメリカの PhD 学生と連絡先を交換し今後に繋がる関係性を築くことができた。

その他、学会の様々なセッションを通し、疫学研究への理解を深めることができた。具体的には、Cancer (がん)のセッションで、若年がん患者や妊婦など、がん患者集団ではマイノリティな属性の人々の現状やニーズを学ぶことができた。Aging (高齢化)のセッションでは、健康状態に個人差が大きく異質性の高い高齢者集団の、健康増進を正確に評価するための新たな指標や概念について最新の知見を得ることができた。

今後の展望 Prospects for the future

本渡航を通して、海外研究者との議論による新たな視座の獲得と、交流経験による英語でのコミュニケーションへの自信をつけることができた。今後も研究成果を国際学会で発表することで自身の研究者としてのプレゼンスを高めていきたい。また、ワークショップで、論文査読プロセスと editor, reviewer の視点を学んだことで、現在の研究成果を質の高い学術論文として完成させることを目指す。さらに、この機会で連絡先を交換した研究者と今後も繋がり続け、海外での研究ネットワークを広げていきたい。最後に、このような貴重な機会への支援を頂き感謝申し上げます。